

---

# 求めるものは記憶の彼方

中宮卯月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

求めるものは記憶の彼方

### 【Nコード】

N4112E

### 【作者名】

中宮卯月

### 【あらすじ】

ジンは人を探している。その人物は背負った業のために、再び生まれ贖罪を続けなければならないことを言い残してこの世を去っていた。長年生まれ変わったその人を探し続けていたジンが最後の望みをかけて訪れたのは、ある小さな情報屋だった。

## 第1話

初めて会ったこの部屋で、初めて会ったときと同じ顔で、アイツはもう放っておいてくれと、どこか満足気に言った。受け入れられずひたすら首を横に振ったおれに、今度もまた足りなかったと笑う。だんだん力が抜けていくのがわかる。視線すら、動かない。掠れるようなその声はもう、音にもなっていない。それでも、覚えるほどに繰り返されたその言葉を、俺が聞き逃すはずはない。

『憎しみはまだ消えていない。償いはまだ、終わっていない。またやりなおさなければならぬ』

「こんな時までいらねえ心配してるんじゃないよ。次に目を覚ましたときには俺と一緒に探してやるから、今はあんたは安心して眠ってればいいのさ。ゆっくり休めよ、」

震えそうになる声を精一杯押し殺してそう答えたのと同時に、とうとうアイツは、呼吸を止めた。

長い間、探し続けていた。その間に多くの人間と知り合った。俺を友と呼んだ者の中にはやがて一国の主となったものもいたし、一国を破滅に追い込んだ革命家もいた。男も、女も、様々な人間がいた。だがその中に、アイツはいなかった。

ただ、ただ、探し続けていた。それは今でも変わらない。どこにいるのか、分からない。もちろん今度のアイツは俺のことなんか当然知らない。

それでも、たった一つだけアイツを特定できるものがあった。

それだけが、俺が旅を続ける理由だった。

「とは言っても、顔も知らない。名前も分からない。そんなんじゃない情報屋にできることなんかあるわけねえだろうが」

「そんなことは分かってんだ。それでも、俺は探さなきゃならねえからな。」

藁にもすがる思いで俺が訪ねたのは地図にも載らない小さな村の、看板すら出していない情報屋だった。

「まあいいだろう。聞くだけなら聞いてやるから言ってみな」

面倒がっているのを隠そうともしないその赤毛の男に、それでも俺は必死の思いで告げた。

「男か女かも分からない。年齢も、人種も、生まれた土地も、俺には全く分からない。ただ一つだけ分かるのは、そいつが黒い瞳の間だということだ」

「黒い瞳？ そんな人間いるわけないだろう。聖教神話の墮ちた神じゃないんだからな」

「普通なら生まれえないな。人間に限らず、黒なんて色は通常のコトには絶対に宿らない色だつてことは俺だつてよく知ってる。だから、どんな小さな情報でもいいんだ。誰にも眼を見せない人間や黒い瞳だと噂されている奴がいたら教えてもらいたい」

「…報酬は？」

情報屋のその言葉は、待ち望んだものだった。

これまで数え切れないほどの多くの店で同じ依頼を続けてきたが、今までで一番色好い返事だ。ほとんどの店では話にならないと追い出されてきたし、俺もそれはむしろ当然の反応だとも思っているから。

それでも、諦めるわけにはいかないのだ。アイツのために。

そして何より、俺自身のために。

「言い値で先に支払おう。見つからなくても返せとは言わないから自由に使ってくれ」

「それなら銀貨で300枚。ああ、金貨にまとめて3つの方が助かるな。ちょうどこの店も改装しようと思ってたんだ。まるまる出してもらおうじゃないか」

その言葉に、俺は迷わず頷いた。

「交渉成立だな。俺は情報屋のハウザー。店に名前は付けてない。それで兄さん、あんたの名前は？」

「ジン。ジン・フェイリアだ。よろしく頼む」

それから俺は旅を続けていた。随分長いこと待ったが、探し人に対する有益な情報は一つも得られない状態だった。

そんな中で、ハウザーからその人物の情報を得たのは、初めてその店を訪れてから3度目のとき。20年目のことだった。

## 第1話（後書き）

初投稿作品です。ずっと頭の中だけで暖めてきた設定なので読んでくださる方からのアドバイスや感想などあれば一層努力していきたいと思っています。

ゆっくりと続きも投稿していきますので、お付き合いいただける方がいれば嬉しいです。

## 第2話

ハウザーによると、その人物は今、ここから南のレリギオンに住んでいるそうだった。どうやら10年ほど前のある日、当時所属していた聖教騎士団を唐突に辞して、そのまま行方を眩ましていた男らしい。宗教都市として名高いレリギオンは世界最大の規模を誇る大聖堂が建設されていて、住民の半数以上が僧侶として日々を祈りに費やしている。彼らの生活は全て教会に保障されていて、その資金は世界各国からの寄付金で賄われているのだと言う。争いもなく、住む人々もとても善良ですばらしい街だとは思っただが、俺はその街がどうしても好きにはなれなかった。

「で、その男だけだな。どうも騎士団でもかなり重用されていたらしくて、行方が知れなくなった翌日には聖教皇の名前で搜索命令が出てたんだよ」

「なら、当然数日のうちに見つかったんだろう？ 聖教皇の言葉って言やあそれこそ一瞬で国中に知れ渡る」

「と、思うところだが、どうやったんだかそいつは5年も見つからなかったんだそうだ。どつかで死んじまつたんじゃないかと思われた頃にひょっこりと自宅に戻っていたらしいが、その時には……」

「髪の色が黒に変わっていたわけか」

その通り、とハウザーは首をすくめた。この情報だけでは瞳の色までは特定できないが、これが本当なら進展には違いない。ほとんどの人間の瞳は青いか、髪と同じ色かに限られる。その男の髪が真実闇色をしているというのなら、その瞳も黒である可能性があるということだ。だがいくつか疑問も残る。

「どうやって戻ってきたのかはどうでもいいとして、その黒髪つてのは信憑性に欠けるんじゃないのか。聖教徒の代表みたいな騎士団を自分から辞めたって言うのなら、脱教の意思表示のために髪を染めただけかもしれないじゃないか。第一、黒髪の間があるとなれ

ば俺みたいな旅人の耳にだつて噂くらい入つて来てもおかしくないのに、そんな話は一度も聞いたことがない」

「そりゃあそうさ。なんて言つたつて聖教皇直々に緘口令が敷かれただからな。おれらみたいなモグリの情報屋の間だけでそれはそれは密かに広まつてる情報だ」

つまり、人の口に戸を立てる必要があると教皇が判断したということだ。これは確かに有力な情報と言えるだろう。

「わかつた。元々あてはなかつたんだ、確かめてみることにする。助かつたよ」

その後、男の居場所やら詳しい情報やらを聞き出した俺はその日のうちに村を発ち、10日かけてレリギオンに到着していた。ハウザーの情報からその男が大聖堂のどこかで拘束されているであろうことまでは分かつたが、その先が問題だった。

大聖堂に入ること自体は大した問題はないのだが、古い知り合いが居るとなると話は別だ。面倒なことになるかも知れない。

以前、やはり人探しのためにこの街にも一度立ち寄つたのだが、そのとき妙に懐かれてしまった少女がいたのだ。当時若干6歳にして騎士養成学問所の全過程を修了した史上稀に見る天才少女の噂は、彼女が聖騎士団結成以来最年少で入団を果たすのと同時に世界中を駆け巡つた。数少ない情報屋と酒場を全て訪ねるまでの数日間、衆人環視のもと実に迷惑に追い掛け回してくれたことは今でも鮮明に思い出せる。正直言つてあれ程一人の人間に深く関わってしまったことは大きな誤算だった。あれからかなりの期間が経っているし、もう忘れてしまつてゐることを祈るしかない。

内心の不安を押し殺しつつ、平然を装つて歩を進めていると、大聖堂前の広場の中心に輝くようなプラチナブロンドを見つけた。よもやと思ひ見てみると、そこに居るのは小柄な少女。大きく波打つ金系の髪は腰の辺りまで伸ばされていて、首の後ろで一まとめに括

ったのを肩から前に流している。身に纏うのは白の軍服で、それは彼女が大聖堂を護る聖騎士団の一員であることを示していた。

その輝くばかりの美貌と明るい薄緑色の瞳にはかつて良く見知った面影が残っている。間違いない。そこに居るのはできることなら会わずに済ませたい人物、かつて出会った少女イクスだった。

気づかれる前にこの場を立ち去ろうと踵を返した瞬間、背中越しに敵しく張り詰めたアルトの声が響き渡る。

「待て、その男。我々聖騎士団を見るなり背を向けるのはあまりに不審な行動だぞ。後ろ暗い理由がないのならこちらへ来て名を告げろ」

どうやら却って目立ってしまったようだ。このままこの声を無視したところで結局は警戒されることに違いはない。

そうでなくとも所詮俺はしがない旅人風情。よもや王国軍に匹敵する権勢を誇るレリギオーンの聖騎士団に逆らうわけにはいかないのだ。一応周りを見渡したが、周りには広場の先にある大聖堂へ向かうのであろう僧侶たちで溢れていて、俺以外に彼女に背を向けている人間は見当たらない。気持ちを落ち着けるために大きく息を吸い込んで、俺はもう一度振り返り、広場の中心に居る少女を見据えた。

そのままこちらへ歩いて来い、という命令通りに近づくにつれて彼女の表情は次第に強ばり、驚いたような顔に変わっていく。気づいたのだろう。俺が、誰なのかに。不幸なことにどうやら彼女は俺のことを覚えていたようだ。なんとか他人の空似でごまかしたいところだが、これはいよいよまずいことになってきた。

ゆっくりと進み出て彼女の正面に立つと、あたりに静寂が広がる。いつの間にか、周りには俺と聖騎士団員以外の人影がなくなっていた。

聖堂の鐘が鳴り響く。礼拝が始まったのだ。

長い沈黙の後にようやく彼女は震える声を絞り出した。

「以前、会ったことがあるな」

控えめだが、問いではない。

「最後に会ったのはもう8年も前のことだが、今でもよく覚えてい  
る。わたしは毎日貴方を追い掛け回しては、迷惑だと冷たくあしら  
われていた」

「記憶にねえな」

頭の隅で警鐘が鳴る。このままではまずい。

「わたしはよく覚えているよ。蒼く輝くような銀の髪と、同じ色彩  
の瞳。あの頃、わたしが付きまとうと周りの視線がうるさいだなん  
て貴方は言っていたけれど、あの視線の中の半分は貴方へ向けられ  
た熱烈な女性の視線だったということに気付いていたのか、いない  
のか。貴方の顔は、一度間近で見たら絶対に忘れない。少しでも変  
わっていたらもっと分かりづらかったかもしれないが、貴方全然変  
わっていない」

「何の話だか全く分からねえよ。人違いだろう」

震える声をそのままに、彼女は一歩ずつ静かに歩み寄ってくる。

「そんな筈はない。わたしは貴方を知っている。そして貴方も、わ  
たしを知っている。そうだろう、ジン・フェイリア？」

恐る恐るといった様子で顔に向かって差し出された手を一歩後ろに  
下がることで避けると、あっさりとその手が引かれ、素早い動作で  
背中に回された。

その瞬間は、何も考えていなかった。意識が追いつくよりも先に  
体が動く。左腕で顔の前方を防御して衝撃をやり過ごすのと同時に  
大きく後ろへ下がって間合いを取ると、細剣を抜いた彼女の両側に  
同じ白の軍服を纏った男が2人、同じように細剣を構えてこちらを  
睨みつけていた。

「随分と乱暴じゃねえか。武器も持ってねえ民間人に切りかかるな  
んで軍人とは思えねえな。びっくりして泣きそうだ」

「しっかり手甲までつけて、傷一つないのによく言うよ。見た目だ  
けじゃなくて動きも衰えていないね。相変わらず、さすがの反射神  
経だ」

「だから覚えているだの、相変わらずだのと何の話だ……」

気配を感じて、まずいと思ったときには遅かった。すでに周りを聖騎士団に囲まれ、少しでも抵抗すれば容赦なく切りつけられる状態になっている。

「潮時だ、ジン。」

再び訪れた沈黙の中、礼拝の終わりを告げる鐘が鳴り響いた。

彼女の言うとおり、ここが潮時のようだ。これ以上白を切ったところで状況は悪くなる一方であることは俺にも分かっている。

「命令に従おう。どこへ行けばいいんだ、イクス」

「やっとわたしを呼んだな、ジン。これから向かってもらうのは聖堂の地下にある拘束室だ。懲罰房と違って手荒なことはされないから安心しろ。それよりも、今の常人離れた反射神経といい、8年経っても全く変わってないその姿といい、貴方は堕ちた神の子ティディアス族の生き残りだったんだな」

ティディアス族。それは今では絶滅したとされる一族の呼称だった。一見しただけでは普通の人間と変わるところはないが、体のつくりが大きく異なっている。俺自身は自分も人間だと思っているが、あえてこの街流に言うならば、母の胎内で10カ月育ち、神の加護によって身に負った怪我は自然と治り、時間の祝福のもと20年程で成長を終え、最期のときに向けて授かった命を少しずつ返すために老いを重ね、50年程生きた後に創造神の下へ帰る人間族に対して、俺たちティディアス族は母の胎内で2年かけて魔性を蓄え、その魔性ゆえに負った怪我が癒えることは決してなく、人間族の30年分の成長を100年かけて終えた後は傷によって死に至るそのときまで堕ちた神のために世を乱す悪しき一族だ。それを理由に、かつて聖教徒は大規模なティディアス族の弾圧を行った。

当事者の俺としては事実無根だと叫びたいところではあるが、この街において事実がどうであるかなど大した問題ではないのだ。教義こそが全てであり、それに従うことこそが善であると心の底から信じている人々でこの街は成り立っているのだから。そんな自我を

捨ててしまったこの街が、俺はどうしても好きになれなかった。

「ティディアスってのはまた、古い言葉を出してきたものだな。200年も前に消えちまった言葉だと思ってたが、それは確かに俺たちの一族のことだ」

悪くすれば命を奪われるかもしれないこの絶望的な状況の中でも俺の心は不思議と落ち着いていた。

「イクス。大聖堂の地下へ、と言ったな」

「ああ、今はもう一人宗教犯として捕らえられた男が入っている。

もう何年も拘留されていたんだが、ちょうど明日は彼の処遇を決めるために聖教皇さまがいらっしやることになっているから、貴方についても同時に今後が決定されるだろう」

「そうか」

イクスのその言葉を確認すると、大人しく指示通りの場所へ連行されることにした。初めの予定とは大分方法が変わってしまったが、それはこの際いいことにしよう。

そこにはおそらく、彼がいる。

## 第2話（後書き）

一度投稿したのですが、書き直し前の古いほうを登録していたことに気付いて登録しなおしました。

本筋と関係のないジンの旅の様子についても色々と考えてあるので、いずれ短編か番外編で投稿したいと思っています。

### 第3話

連れて行かれたのは、聖堂内では比較的小さな一室だった。中にはベッドが2つと一人がけの椅子が2つ置かれていて、奥に続く扉がある。豪華な調度品こそないものの、これなら一般的な宿の一室とそう変わらない。

「拘束室って言うくらいだから牢に近いものだと思ってたら、普通の部屋なんだな」

思わずつぶやいた俺に答えたのは、ここまで俺を連行してきた騎士だった。

「ここは主に宗教や政治の犯罪に関する容疑者が入れられます。中には社会的にとても地位の高い方もいらっしゃいますから、これはその方々に対する最低限の礼が尽くせるようになってるんです」

「また、何でそんなところに俺が？ 自分で言うのも妙な気分だけど、身元も怪しいような一介の旅人だぜ」

「イクス隊長の指示ですから、おれのような下っ端風情にはわかりかねますね。さあ、見て分かるでしょうがここが主な生活空間です。食事は決まった時間に運ばれます。次の食事の時間に食器を下げますのでそれまでに食べておいてください。トイレは奥。普段の行動はこの部屋の中であれば自由です」

大した注意事項もないのか、いくつか規則を告げた後はその騎士も早々に部屋を後にし、俺一人が残される。奥の部屋から人の気配がするから、どうやら先に収容された男はそこにいるようだ。しばらく待つと扉が開かれ、入り口をくぐるようにして人が出てきた。扉が小さいわけではない。それだけ、彼の身長が高いのだろう。俺とそう変わらない体格をしている。水に濡れた黒髪をかきあげると、彼は静かに俺を見つめた。

シャワーまで付いているのか、などと全くもってどうでもいい感想が思考を掠めたが、俺の視線は彼の黒髪に釘付けになっていた。

「水に濡れても落ちないほど高性能な染粉が開発されたのか？」

我ながら実に下らない言葉が口をつく。静かな高揚感に支配されている俺へ律儀に男は答える。

「さあ、もしかしたらそんな発明があったのかもしれないが、生憎私は知らないな」

低く、静かな声だった。その響き渡るような重低音にもちろん聞き覚えはなかったが、不思議と懐かしいような気持ちがする。

ようやく髪から視線を移した俺だが、次に目を奪われたのは整いすぎて作り物めいた顔立ちでも遠く北の大地で見た雪のような白い肌でもなく、彼の双眸だった。

蒼ではない。茶でもない。灰色にすら見えない。そこには闇色の黒髪よりも更に瞑い、全ての色彩を飲み込むような混沌とした黒があった。

どれほどの時間、そうして見つめていたのだろうか。彼が発した言葉が耳に届いたとき、やっと俺は我に返った。

「街を出て帰ってきてから、こうして眼をじっと見られるのは初めてだな。今までは目立つ髪の毛のほうにみんな気をとられて眼を見ようとする人間はいなかった」

その声には、悲痛さは微塵も含まれていない。そこには何か、確固たる意志のようなものさえあった。

自分の意思とは別のところで、体が歓喜に震えるのを感じる。遠い昔に、ほんのひと時感じた安堵感。それは、こんな響きの声と共にあつたときではなかったか？ 何者にも覆されない、断固たる意志を貫くアイツを、とうとう見つけたのではないだろうか。

逸る気持ちはしかし、言葉にはならず、思考だけが体中を駆け巡る。問うべきことは何だ？ 告げるべきことは？ 大きく深呼吸をして、気持ちを落ち着ける。

「俺はジン・フェイリア。あんた、レイドルク・シラーだろう？」

何年か行方を眩ました後で黒髪になって戻って来たっていう元聖騎士団長の「

冷静になった俺の問いを、男は頷くことで肯定した。

「ちよつとした噂であんたのことを知ったんだ。こんな所へ入れられたのは予想外だったが、こうして2人で話す時間が持てると思えばむしろ好都合だったな。できれば、話してみたいと思ってるんだよ」

「私と話？ 興味本位の問いに答える気はないが」

ともすれば剣呑なものに思えるような言葉だったが、レイドルークの表情には敵意や警戒心は感じない。むしろ、予想外の出来事を楽しんでいるような軽さがある。

「なに、大したことじゃねえんだけど。その黒瞳をどこで受け取ってきたのかと思ってな」

俺の口から発した声が周りにある何かを震わせ、レイドルークの元に音として届くまでがひどく長く感じたのは、その時の彼の息を呑むような反応がやけにゆっくりと見えたからだろうか。それまで薄い微笑を浮かべたまま変わることもなかった彼の表情が小さく揺らいだのを、俺はじっと見つめていた。

「なぜ、そんなことを聞くんだ？」

硬い声だった。警戒を露わにしたレイドルークと俺との間に張り詰めたものが漂う。

「俺はもうずっと、人を探してんのさ。黒い瞳の中に刻まれた記憶に、俺の求める言葉を持っている人間。顔も名前も分からねえし、いつ、どこで生まれたのかも分からねえ。もしかしたら、俺の知らない間にもう死んじまったかもしれないねえ。だけど俺は、あんたを見つけた」

長い、本当に長い間探していた。それでも、今日この日まで、一度たりともその言葉を持った人間に会うことはできなかった。黒い瞳が必ずしもその言葉を刻んでいるとは限らないことを知ったときの絶望は言葉では言い表せないほどだったが、それでも諦めようという気持ちにはならなかったのだ。

長い沈黙が訪れる。こちらの真意を測ろうとするかのようにレイ

ドルークは俺を見つめていたが、やがてふつと緊張を解き、元の柔らかな表情に戻った

「まあ、いい。悪意あつての問いではなさそうだからな。氷の岬を知っているか？」

彼はゆつくりと呟いた。

「ああ、どこの国にも属していない、北の果てだろう。知っているも何も、俺の一番古い記憶はその場所から始まつてる。あの頃はまだ、今の俺の半分の背丈もなかっただろうな」

「それほど幼い頃からあの氷漬けの岬に……！？　そうか。見たところ旅の道中のようにだつたし、何故この部屋へ入れられたのかと思つていたが、貴方はティディアス族だつたのか」

俺の言葉に、レイドルークは驚いた様子だつた。氷の岬と通称されるその台地は、この街にいるような多くの人間にとつて限りなく厳しい土地だ。吐く息さえも凍りつくかのようなその寒さの中では、屈強な男たちでも万全の準備なしでは3日と生きられないだろう。身体の弱い子供の頃からあんな土地にいられるのは、温度変化に強い耐性を持つティディアス族しかありえない。

「その通り。極寒の土地でしか出産のできないちよつと変わった種族さ。それであんた、わざわざあんな辺鄙な土地まで行つてその不吉な色を宿してきたのか？　何でまた」

「何故と言われてもな。私は物心ついたところから、いずれはあの場所へ行つて預けていたものを受け取らなければならぬことを知っていたから、かな。それまで毎日受け取つていた神託が全く聞こえなくなつた日に、時が来たのを知つた。だから行つた」

「そんなもん、無視しちまえば良かったんだ。そうすれば、あんたは神官騎士としていつまでもここにいられた。その色を拒むことはあんたには許されていた。だからこそ、生まれ持つてはこなかつたのに！」

そう、拒むことは許されていた。望まぬものが、覚悟のないままに受け取つてしまうことのないように。それが、アイツが最期に捧

げた、生涯唯一つの祈りだった。

「確かに、そうかもしれない。だが、私は知っていた。この色は私への戒めだ。憎しみはまだ消えていない。償いはまだ終わっていない。だから私はまだ、何人にも許されてはならないんだ」

それは、決定的な言葉だった。かつて幾度となく耳にした自戒の言葉。彼が捜し続けた人であることの証明。

俺はようやく、見つけたのだ。

### 第3話（後書き）

大分期間が開いてしまいましたが、3話投稿です。自分が予想していたより読んでくださっている方が多いので喜ばしい限りです。ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4112e/>

---

求めるものは記憶の彼方

2010年11月19日16時52分発行